

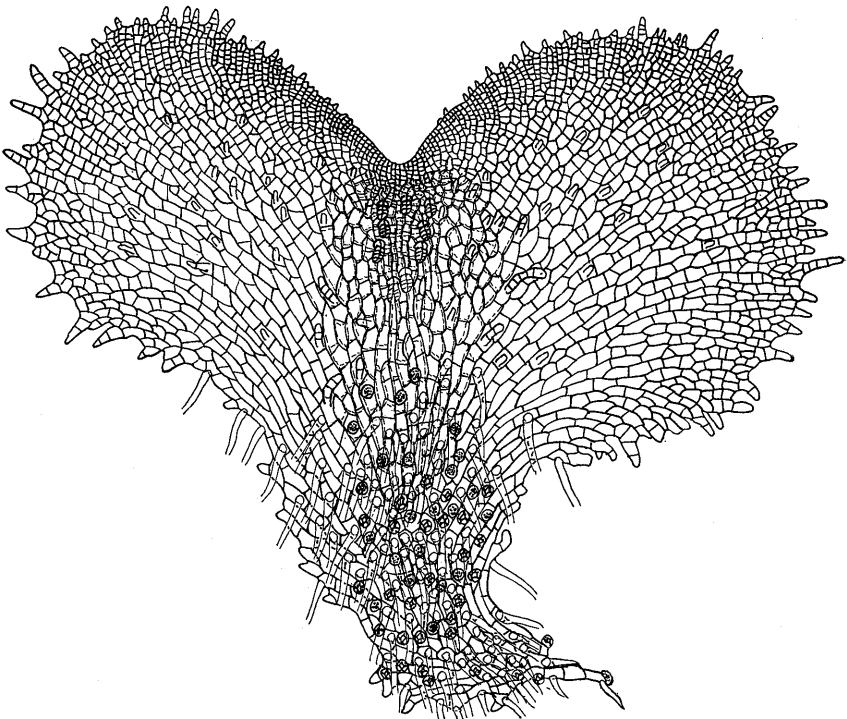
百瀬 静男*: チャセンシダ科の前葉体** (6)

Sizuo MOMOSE*: The prothallia of Aspleniaceae** (6)

14) **Tarachia friesiora** (C. Chr.) Momose, comb. nov. = *Asplenium friesiorum* C. Chr. in Notizbl. Bot. Gart. Berlin 9: 184. 1924.

本種はアフリカに産する。材料は Royal Botanic Gardens, Kew から入手したものを使用した。

前葉体は心臓形で、頂部中央はやや深く、丸くあるいはくさび形に彎入し、両翼片の内側辺は開いている。下部は丸くあるいはくさび形に狭つて原絲体に移行する。原絲体は3~4個の細胞よりなり、基原細胞は円柱状に胞子外殻より突出する。両翼は蝶翼状

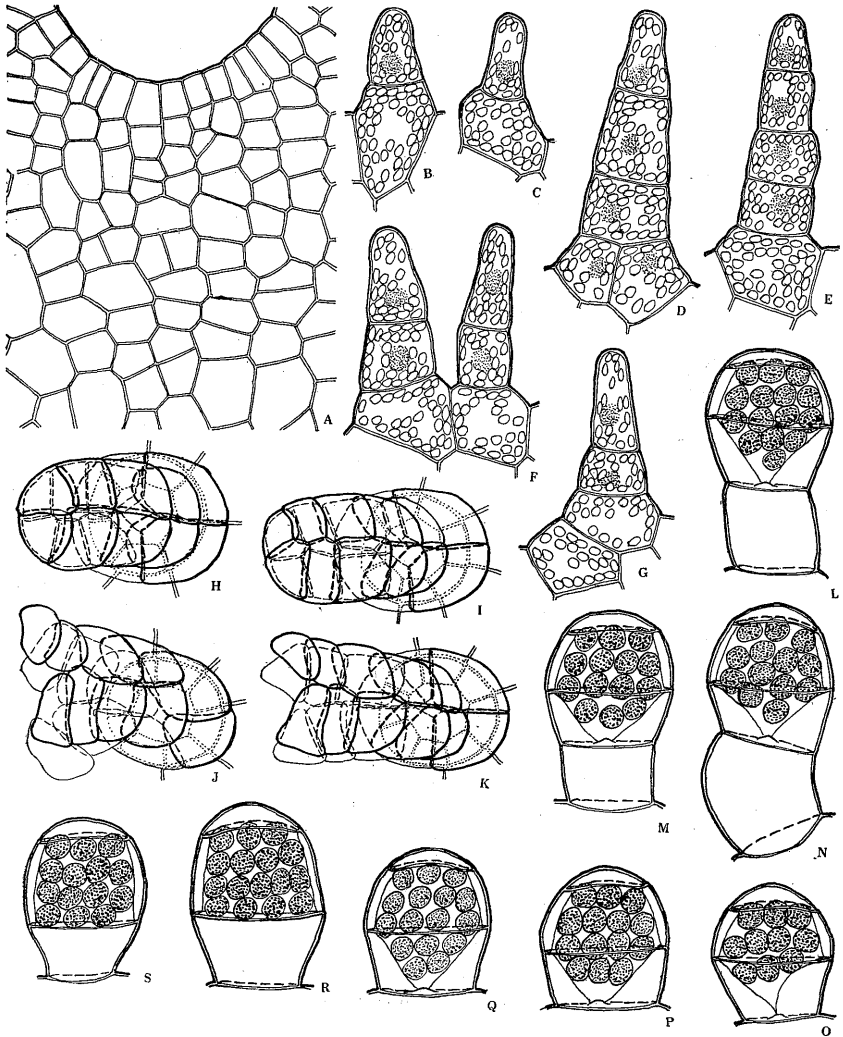


第 33 図 *Tarachia friesiora* (×18)

* 文部省大学学術局. Higher Education and Science Bureau, Ministry of Education, Tokyō.

** 文部省科学研究費総合研究 4069 による研究の一部である。

に斜上し、翼縁は不整波状乃至鋸歯状をなす。翼細胞は不規則な等方形で、分裂列は明瞭である。翼縁の細胞は不規則な等方形で、側方に突出することなく縁は平滑であり、その縁側は殆んど平坦である。翼縁には密に、翼面には疎に乳頭状突起を生ずる。乳頭



第34図 *T. friesiora*

A, growing point ($\times 143$), B—G, papillae at margin ($\times 220$), H—K, archegonia ($\times 220$), L—S, antheridia ($\times 220$).

状突起は翼縁に生ずるものでは乳頭形のものが多く、長さ 33~69 μ 、根元幅 25~35 μ あり、中央に位置する核と翼細胞と同等の葉緑粒を含む。乳頭状突起を生ずる縁細胞は強く側方に突出し、または縁が側方に突起して細胞列をなして乳頭状突起に移行し、乳頭状突起は縁細胞と形状の上でもまた内容からも区別が明瞭でないものが多い。このため縁は不整鋸歯状をなす。翼面に生ずる乳頭状突起は翼縁のものに比して長く、また、2~6 細胞の列よりなる多細胞突起をなすものが多い。この場合においても突起細胞は翼細胞と殆んど同等の葉緑粒を含み、内容の分化が見られない。仮根は通常無色透明であつて、中褥の下部以下に生じ、翼部にまで拡つて生ずる傾向がある。中褥は下面中途より頂部生長点に達する比較的大形の褥をなし、倒卵形で 3~4 層の細胞よりなる。造卵器は中褥の中部以上に生じ、4 系列をなす頸細胞は前列 5~6 個、後列 3~4 個の細胞よりなり、最下位のものは大形で頸部の座をなす。造精器は仮根に伍して中褥の下部以下に、造卵器群の下方にへだたつて生じ、球形乃至倒卵形で、直径 70~80 μ あり、底細胞は環細胞と等幅・等高で、その上膜は陥没して底膜にまで達し、あるいは平坦のこともある。1 個の台細胞を有し、その上に生ずるものが多い。

本種の前葉体は前記の *Tarachia fontana* に比して、1) 頂はくさび形に彎入すること、2) 翼縁に生ずる乳頭状突起の形状、3) 翼面に生ずる突起は特に大形で数細胞の列よりなるものが多いこと、4) 仮根は無色透明であること、5) 中褥は比較的大形であること等によつて区別される。このうち、翼縁に生ずる乳頭状突起の形状とこれにともなう翼縁の状態は前記 10) の *Tarachia ruta-muraria* と共通であり、また、翼面にある突起は特に長大で数細胞列からなるものが多いこともこの種類との共通性がみられる。

以上 8)~14) の 7 種類の前葉体は概形、頂の彎入状況、翼細胞の大きさ、乳頭状突起の発生状況および形状、仮根の色、造卵器の頸部の形状、造精器の大きさ等によつて相互に区別しうが、翼縁および翼面には乳頭状突起を生ずるという顕著な標徴により、前述の *Euasplenium* や *Oligophlebium* 型と明確に区別し得る一型をなしている。この乳頭状突起は *Asplenium* およびその近似属においてのみ見られる特殊なもので、形状は乳頭状から乳棒状まで種類により色々であり、また、多細胞突起のこともあるが、突起細胞は翼細胞とほとんど同等の葉緑粒を含み、性質上の分化が見られない。また、帽を分泌することは極めて稀である。

筆者は 1941 年に *Tarachia caudata* Presl およびヒノキシダ *Asplenium prolongatum* Hook. の前葉体を報告し、特に乳頭状突起を有することによつて両者は類似しており、*Asplenium* の基準形と明確に区別されることを指摘したが、この観察は前述のようにその後の観察の結果とも一致する。よつて筆者は既報ヒノキシダ *Asplenium prolongatum* Hook. を *Tarachia prolongata* (Hook.) Momose* とし、これら種類の前葉体は

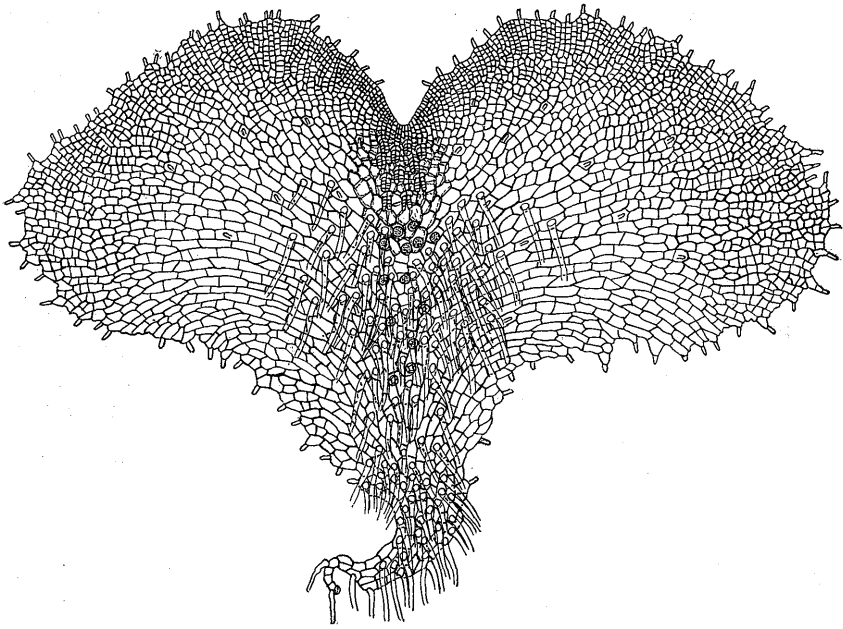
* *Tarachia prolongata* (Hook.) Momose, comb. nov.—*Asplenium prolongatum* Hook. 2nd Cent. Ferns t. 42 (1860).

前記7種類と同一型とみなし、この型に属する種類をもつて前葉体からみた *Tarachia* Presl を理解する。

15) ***Tarachia platyneuron*** (L.) Momose, comb. nov. = *Acrostichum platyneuron* L. Sp. Pl. 2: 1069. 1753—*Asplenium platyneuron* Oakes ex Eaton, Ferns N. Amer 1: 24. 1878.

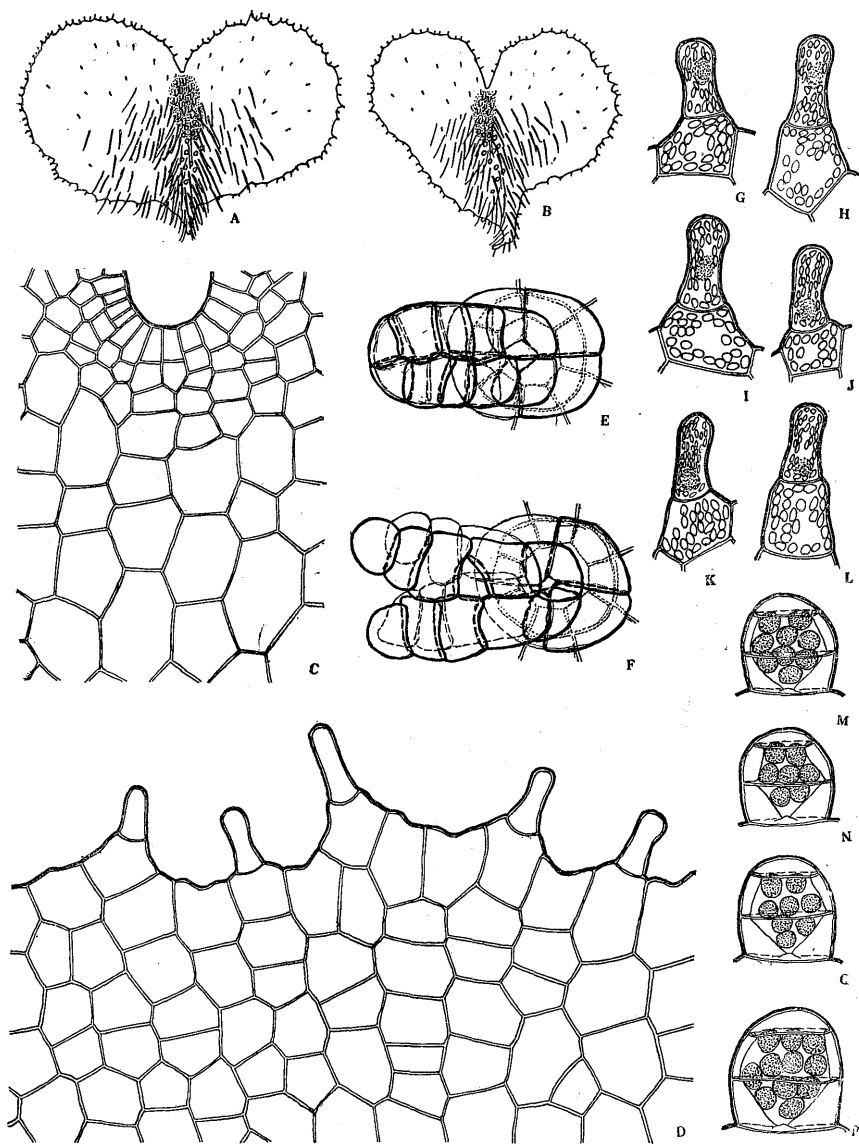
本種は北米・ジャマイカ・アフリカに亘つて分布する。材料は服部植物研究所岩月氏の御好意により Knoxville, Tenn., U. S. A. 産のものを使用した。

前葉体はやや横広い心臟形で、頂部中央はやや深くくさび形に嚢入し、両翼片の内側辺は開いている。下部は急に狭まり底はくさび形をなして原絲体に移行する。原絲体は



第35図 *Tarachia platyneuron* (×18)

3~5個の細胞よりなり、基原細胞は円柱状に孢子外殻より突出する。両翼は蝶翼状に斜上し、翼縁は不整波状乃至鋸齒状をなす。翼細胞は不規則な等方形で分裂列はやや明瞭である。翼縁の細胞は等方形で、側方に突出することなく縁は平滑であり、その縁側は凹形をなす。翼縁にはやや密に、両翼面には疎に乳頭状突起を生ずる。乳頭状突起はこん棒形で、長さ40~53 μ 、根元幅25~30 μ 、中央幅17~21 μ あり、中央または下部に位置する核と翼細胞に比して小形の葉緑粒を含む。突起を生ずる翼細胞は強く側方に

第 36 図 *T. platyneuron*

A—B, general aspect ($\times 5.5$), C, growing point ($\times 145$), D, a part of margin with papillae ($\times 145$), E—F, archegonia ($\times 220$), G—L, papillae at margin ($\times 220$), M—P, antheridia ($\times 220$).

突出する。仮根は淡褐色を呈し、葉状部の中部以上にまで亘り、広く翼部にまで拡つて生ずる。中禰は下面上部に倒卵形乃至長倒卵形の禰をなし、小形で3~4層の細胞からなる。造卵器は中禰全面に亘つて生じ、4系列をなす頸細胞は前列6個、後列3~4個の細胞よりなり、最下位のものは大形で頸部の座をなす。造精器は中軸帯に沿うて中禰の下部にまでわたつて生じ、上方では造卵器群につつき、あるいは混生する。球形で直径54~70 μ あり、底細胞は環細胞と等幅・等高で、その上膜は陥没し底膜にまで達する。

本種の前葉体は、1) 乳頭状突起は短いこん棒状で、葉緑粒は翼細胞のものに比してやや小形であり、性質上の分化が明らかであること、2) 造精器は中軸帯に沿うて中禰の下部にまで亘つて生じ、上方では造卵器群につつきあるいは混生することによつて前述の *Tarachia* と明瞭に区別される。しかし、乳頭状突起は分泌物の帽を生ずることがないことにより、*Tarachia* のそれと同一のカテゴリーに属するものと考ええる。よつて、本種を *Tarachia* に含め、造精器が造卵器群につつきあるいは混生することにより、その亜型とする。

○高等植物分布資料(17) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (17)

○平戸島における植物分布資料 長崎県的高等植物分布資料としては外山(1957)の「長崎県植物誌」があるが、これに記録されていない種類で、平戸島で採集したものを次に摘記する。(長崎県平戸市猶興館高校平戸南分校津吉教室 平松信夫)

1) ケムラサキニガナ *Lactuca sororia* Miq. var. *pilipes* (Migo) Kitam. 1959年6月26日、島の中部上床の東麓粗林中で採集。

2) キョズミウツボ *Phacellanthus tubiflorus* Sieb. et Zucc. 1959年6月21日、島の中部、安満岳(534 m)の山頂社叢中で採集。ここは、イスノキ、アカガシを優占種とする原生林で、アカガシの巨樹の下、深い落葉に半ば埋もれて開花していた。

3) ハシリドコロ *Scopolia japonica* Maxim. 1954年7月14日、同じく安満岳、山頂から30 mほど下ったイス、アカガシ林中で採集。

4) コシロネ *Lycopus ramosissimus* Makino var. *japonicus* (Matsum. et Kudo) Kitam. 1959年6月26日、安満岳の社叢入口、鳥居前の空地に群生する。ここは多少湿地である。

5) フナバラソウ *Cynanchum atratum* Bunge 1952年5月31日、島の南部の志々伎で初採集。草原に点生するやや普通種。

6) マルバノフナバラソウ *Cynanchum Kramerii* (Fr. et Sav.) Matsum. 北村：原色日本植物図鑑上に、山口県と並んで平戸島が記載されているが、前記植物誌には記されていない。1959年10月24日、島の中部、紐差の原野で採集。(p. 333 へつづく)